

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

儒教文明と華商の経済活動

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 陳, 天璽 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5252

儒教文明と華商の経済活動

陳 天 璽

1 はじめに

八〇年代以降のアジア経済の発展は国際経済の活力の基となっている。その中でもアジアNIEs（新興工業国・地域）である韓国、台湾、香港、シンガポールは「四頭のドラゴン」と呼ばれ、その急速な経済成長は多くの経済学者及び現代化理論の研究者の注目を集めてきた。さらに近年では、東南アジアや中国の経済が飛躍的な成長率を持続し、二一世紀は「アジア太平洋の時代」であるともいわれている。

「アジアの奇跡」の原因解明については八〇年代より活発にその研究が進められてきた。そうした研究は大きく制度論と文化論の二つに分けることができる。マクロなレベルから各国の政治経済体制に発展の原因を求めるのが制度論であり、その結論は、政治が安定している環境において、良好な経済政策の執行を持続すれば経済は発展するということである。アジアの経済発展は、安定した政府があるがゆえに達成されたのであり、それは指導者層と効果的な経済政策、つまり強固なリーダーシップと優秀な官僚が基礎となっていると考えられている。一方、ミクロなレベルから、社会的、文化的な側面に焦点をあて、儒教倫理などに

アジア型資本主義発展の理由を求めているのが文化論である。ハミルトン (G. Hamilton) (1) やレディング (G. Redding) (2) はアジア、特にアジア経済の主な担い手である中国系社会のメカニズムに焦点をあて、家族主義がネットワークを生み、そのネットワークがアジアの経済発展に貢献したと考えている。

レディングはマックス・ウェーバーと共通する視角から、華商にまつわる歴史的背景や儒教思想に基礎をおく価値観や倫理的精神を分析することで、中国系資本主義の精神とはどのようなものであるのかを解き明かしている。一方、アジアの経済発展をネットワークという視点から比較研究しているのは、ハミルトン達のグループである(3)。

この研究は、「儒教文化圏」といわれているアジアでの経済発展の源泉をその地域の文化にあると捉えながらも、各国の政治経済体制による違いから生まれる差異はないかという制度論者の視点を意識した文化論的研究である。具体的には、アジアにおいて経済発展を遂げた諸国に焦点をあて、各国でのネットワークを比較し、それぞれの特徴を明らかにしている。そしてその結論は、ネットワークの特徴が、日本企業、韓国企業、そして華商企業、それぞれにおいて独特であるということである。華商企業はさまざまな

政治経済体制下にありながらも、そのネットワークは基本的に個人や家族が原点であるという共通した特徴を持っている。一方、日本は、個人ではなく企業、しかも大手企業を中心としており、また、韓国は国家に特惠を与えられたエリートのビジネス・ファミリーの強い支配によって成り立っていることが明らかにされた。

近代に入り、国民国家が形成され、国家や政治体制をベースにしたものの見方が主流とされてきた。第二次世界大戦後、民族が国家や制度によって分断され、現在でも中台問題や南北朝鮮問題などのように残存し、緊張の絶えない国際環境を形成している。冷戦の終焉後、特に近年では、民族、宗教、制度をめぐる統合と分岐がさまざまな問題を引き起こし、国民国家のレベルだけではなく、サブ・エスニックもしくはトランスナショナルな視点など、より複合的な視点によるアプローチが必須になってきた。そうした意味で、ハンティントンの文明の衝突に対する予測論は、文明と文化を明確に区別していない点で議論の対象になっているものの、国民国家を脱した視点であるがゆえに新規性を持ち、注目を浴びたのであろう。

以上のような文化論の潮流を踏まえ、本論ではアジアにおいて活発な活動をしている華商(4)に焦点をあて、彼ら

が共有する文明と経済の関係について考察したい。華商は多数の異なった政治経済の体制の下でその社会的基盤を築きながらも、経済活動を行う際は人的な繋がりを利用し、世界中に散在する華商と協力している。華商ビジネスの発展の一要素に、彼らのトランスナショナルなネットワークの所有と利用がしばしば挙げられる。それは、ネットワークを通してビジネス・チャンスや情報などを得ることができ、発展の機会を増やしているというものである。こうした華商のネットワークのもとを遡れば、家族主義、五倫ともいわれる「関係 (guanxi)」や「信用 (xinyong)」の重視など、華商に共通した儒教文明⁽⁵⁾を中心とする倫理精神が基本になっているのではないかと考えられる。海外への移住当初、こうした価値観の共有が血縁・地縁をベースにした共同体組織を自然発生的に形成し、移民としての逆境に耐え、生計をたてる支えとなったのである。

2 宗教と資本主義の精神

マックス・ウェーバーが社会学において偉大な名声を築いたのは、広範にわたる宗教の比較研究であろう。彼の研究の主たる対象は宗教教義の合理化の過程であり、宗教教

義がいかに迷信の要素から脱却し、普遍性のある倫理に発展することができたかという点にある。彼は資本主義の背後に在る人間の精神と行動・態度に興味を持ち、「近代西洋」の合理主義の起源を探究していた。ウェーバーは宗教の合理化 (religious rationalization) のさまざまなモデルがそれぞれの地域において、経済的合理化にいかなる影響を与えているかに注目していた。その研究の焦点は西洋の「合理的資本主義」の発生のさまざまな条件を探ることであり、プロテスタンティズム、中でも特にカルヴァンの教義と資本主義の深い関係性を指摘したことは広く知られている⁽⁶⁾。すなわち、プロテスタンティズムでは、勤労と節制が強調されており、神の召喚のもとで働くことは神聖なことでであると教えられた。労働によって与えられた富や財産は神に尽くすことによって、与えられた恵みであり、肯定的に捉えられた。人間は神に尽くすことによって富や財産を持つことができても、浪費をしてはならないと考えられ、これは「世俗内的禁欲」⁽⁷⁾とされている。

こうした教義によって人間の行為の動機と資本主義の精神はまさに融合するのである。この融合が資本主義の発展に大きな意味を持った。言い換えれば、ウェーバーはプロテスタンティズムの価値観が経済体系のエートス (精神)

に与えた影響を研究したのである。ただし、急いでつけ加えねばならないが、ウェーバーはこれが資本主義が発生した唯一の原因であるといっているわけではない。資本主義の発生は多くの条件の総合の結果であり、プロテスタンティズムはそうした多くの条件のなかの一つであるという点が重要である。金耀基がいうように、「ウェーバーのこの種の解釈は、価値観が人の行動に作用する理論的定位を与えたのであり、宗教の価値観が経済発展に影響を与えうる一つの独立した要素であるということをいったところに大きな意味を持つ」のである⁽⁸⁾。

こうしたウェーバーの研究の視点、つまり倫理精神の視点から経済発展や社会変遷を分析するという研究枠組自体は有効であろう。しかし彼が『中国の宗教—儒教と道教』において、中国社会は儒教などの影響により、家族主義など非合理的価値観があるため資本主義は発展しないと指摘した点については異論がある。筆者は、アジアの経済発展において華商が多大な影響力を及ぼし得たのは、華商のネットワークの効用が一要素になっていると考える。そして華商のネットワークはまさに彼らの文化的な背景と資本主義精神（合理的な思考）とが融合したその所産であろう。華商は祖国中国を離れ、他の国に基盤を置き、その国の国

民として生活しながらも、中国文明、儒教の倫理精神の影響を多分に受けている。こうした視点から、本論では華商の経済活動を彼らの文明、特に倫理精神との関わりの中で分析してゆく⁽⁹⁾。

3 儒教文明と華商Ⅱ士と商

儒教は中国社会でも限られたエリートだけに共有された思想であつたし、また、儒教文明の中で商人は最下層に位置づけられていた。そうした背景の中、はたして儒教思想と華商の価値観は繋がりを持つのであろうか。余英時⁽¹⁰⁾は、中国の商業が発展した宋代と明や清代の商人の倫理と彼らの思想背景に注目し、儒教倫理が商人に与えた影響を検証している。

余はまず、清代の沈垚による宋代以来の商人の社会的機能の変遷に関する観察を引用して議論の出発点としている。その引用では、宋元以後の商人の地位の変化や科举制度の経済的基礎が説明されているが、そこには二つの主要な論点が含まれている。第一に、宋以後の士は商人の家庭から出た者が多く、士と商の境界線をはや明確に引くことが不可能になっていること。第二に、商業の中国社会に

おける比重がますます増加しているため、多くの社会公益に関わる地位も士大夫の手から商人に移っていたことである⁽¹¹⁾。元来、「士農工商」というように、商人はもっとも低層に属していたが、宋代に入ってから商人の地位が上昇していくのが分かる。

また、商業を営むことは学問を道とする者と元来無縁であった。しかし、陳確（一六〇四—七七）が書いた『学問は治生を本となすの論』では、儒者の学問には二事あり、一は「治生」、二は「読書」である、としている。しかも「治生」は「読書」よりも切実であるとされた。士は必ずまず独立した経済生活をしなければならず、そうして初めて独立した人格を有するといふものである。このように、陳確が道德の物質的基礎を重視したことは、儒家の倫理の発展と見なすことができる⁽¹²⁾。このように、明・清代の儒者は商人の社会的地位を改めて評価し直した。また、儒者の代表ともいえる王陽明が一五二五年に商人の方麟に書いた一篇の墓表からもそれがわかる。その文章の歴史的意義はいくつかの点から説明できる。第一に、方麟の活動していた時期がまさに一五世紀後半だということである。彼が科挙の受験準備を放棄して商業に転向したことは、後世の「儒を捨てて賈に就く」という典型の走りである。第二は、方

麟は若いとき「士」の出身であったため、儒家思想の薫陶を十分に受けており、転業した後も自然に儒家の価値観を「商」の階層の中に持ち込んだ点である。これは儒家の倫理がどのようにして商人階級とつながりを持つようになったのかということを説明する具体的な例である。第三に、王陽明の商人に対する見解が示されている点である。それは「終日商売をしても、聖賢たるところに障りにならない」というものであった⁽¹³⁾。

明清の社会的価値体系がこのように深く微妙な変化を生じてくる原因は、もちろん複雑であるが、その中で筆者が注目する点の一つある。それは、明清の商人の成功は、士人にとっても大きな意味があった、ということである。明清にあった献納制度は、商人のために仕官の道を開き、彼らに少なくとも官位と功名を取得させ、商人は地方で勢力を有する紳商になることができたのである。こうした傾向は現代の華商にもしばしば見られる。華商の肩書を見ると、ビジネス以外にも多くのタイトルを持っているのが普通である。それは民間や地方の組織をはじめ、場合によっては、中央政府の官位についている者もいる。それらもやはり献納などにより榮譽の記として与えられたものが少なくない。そのほかに、博士号を持っている華商も多い。それも

大学などへの献納の「お返し」に与えられたものがあると思われる。もちろん、中には自己の学問の結果取得した者もいるが。

筆者は一九九四年一月中国の中山大学の建校記念日の祝典に参加した際、多くの成功し名声を上げている華商に会い、彼らの活動を観察することができた。彼らは榮譽ある卒業生、そして献納者として招かれていた。そこには、香港の華商で金利来グループを率いる「ネクタイ王」と呼ばれる曾憲梓、マカオの「カジノ王」霍英東など多くの有力華商が含まれていた。特に曾は今回大学に施設や奨学金制度を創設し、献納をしたことで称えられていた。ところで、この曾の肩書を見てみると、彼が前に述べた彼の企業的主席であることはいうまでもない。彼は博士号を取得しており、そのほかに、香港では香港特区籌委會予備工作委員會委員、香港事務顧問、中国全国工商管理學院教授、香港中華總商會會長、中国では北京大学工商管理學院教授、廣州暨南大學副董事長、そして中華人民共和國全國人民代表大會常務委員等のタイトルが連なっている。香港事務顧問とは、樋泉によれば、「単なる名誉職ではなく、実は中国の経済発展と、台湾・ASEANの華商資本を結び付ける大きな役割を演じていると同時に、香港が一九九七年返

還以降も香港であり続けるための重要な要素である香港経済の根幹を左右し得るだけの実力を備えた人」⁽¹⁴⁾が就く要職である。さらに曾はもともと大きな業縁といわれる世界華商大会の第二回大会を主催した香港中華總商會の會長として経済界で活躍するだけでなく、学術界では北京大学などとの繋がり、そして極めつけとしては香港や中国の政界にも籍を持っているのである。商業で成功した者は、財力などさまざまな形で名声を広げ、国家政治に関わる地位に就くこともあるということである。曾の例は明清時代の士と商人の關係が現在の華商にも当てはめられることを示しているといえよう。

4 ビジネスネットワークを広げる「關係(guanxi)」

華商のもっとも重要な特徴の一つは、個人的ネットワーク、つまり親族關係や交友關係などをビジネスネットワークとして最大限利用することである。香港の華商で欧米人をパートナーに持つ星光グループの社長林光如はインタビューの際、以下のように述べていた。「欧米のビジネスマシンの友好關係はビジネスから個人關係へと發展し、例えばビジネスで信賴關係を築いた後、ホームパーティーに招か

れるということがあるが、個人的な繋がりがビジネスに発展することは多くない。しかし、華商のビジネスはしばしば個人的な関係から発展したものである。それは華商のビジネスが契約よりも信用を重んじるということと無関係ではない。信用がもっとも大切な規範であり、それによって「関係 (guanxi)」が形成されてゆく。そして、それは非常に個人的なものである。日本企業のビジネスも信用を重んじるが、それは経営者トップ同士の親交関係によるものではなく、企業間の信頼関係が基本となっている。しかし、華商企業に関しては、その信頼関係はビジネス上の信頼関係だけではなく、経営者トップ同士の親交関係から生まれたものである。よって、それはプライベートなものであり、そして信用という倫理によって結ばれたものであるため、彼らのビジネスネットワークは実質的には目にみえないものであるといえる。実体がなく、非常に曖昧なものなので、ネットワークが存在しているか否かはその人の捉え方によって決まる。しかし、ネットワークが存在していると捉える本論では、その基盤となっている「関係」をもう少し掘り下げて見てみたい。

儒教思想が礼、倫理、道徳を重んじることは知られている。そのうち、礼の基本として五倫が据えられ、それは人

倫主義を重んじている。なぜなら、人間というものは個で生きるのではなく、必ず人間関係の中で生きるからだということである。五倫は、人間関係を五つに分け、例えば父子関係は親しみが一番大切だというように、「父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信」といい、五つの人間関係の一番大事な徳を「親、義、別、序、信」とした。人は一人だけで生きるのはなく、こうした関係の中で初めて生きることができるとだと言われている。上に述べたように、華商が個人的な「関係」や「信用」を非常に重んじ、それが日常生活やビジネスに表われているのは、こうした儒教倫理の影響から来ているのであろう。「関係」は、人脈やコネを指し、人的ネットワークともいえる。華商との間ではもちろん、中国系社会において、物事の治療や目的達成の際、そこに人が介入する限り、成否の鍵となりうるほど「関係」を持つことは大切なのである。

中国系社会では「有関係就沒關係、沒關係就有關係」という言葉がある。「有」は「ある」、「没」は「ない」という意味で、「関係 (guanxi)」と連ねて、「関係を持っている (關係がある)」、「関係を持っていない」という意味になる。一方、もう一つの意味として「沒關係」とは中国語で「大丈夫もしくは問題がない」という意味を持ち、よって「没

関係「有関係」は、「大丈夫」「問題がある（大丈夫ではない）」という意味になる。したがって、「有関係就没関係、没関係就有関係」は、訳せば「人脈が有れば問題はなく、人脈がなければ問題だ」ということになる。

この言葉が表わすように、中国社会は「コネ」や人脈がものをいう社会であり、こうした文化的な背景もあり、ネットワークを多く持てばそれだけ有利なのである。強力なネットワークさえ持っていれば、その上に流れる人・カネ・情報などの問題は解決されてくる。ネットワークを通じて良い情報が入る可能性が高くなるとともに、ビジネスを遂行する際にネットワークはさまざまな面でコスト削減にも繋がる。つまり、彼らのビジネスの成否は個人的なネットワークにも左右されてくる。よって、華商は、「関係」構築に熱心であり、さまざまな組織や会合などに参加している。こうして、成立し、拡大したネットワークが彼らのビジネスの特徴として注目されている。

ハミルトンとワン (Z.Wang) は成功する企業家のネットワークは湖に投げ込まれた石を中心にして広がってゆく円のようなものであるといっている⁽¹⁵⁾。企業家は「石」であり、自分を中心として三六〇度あらゆる方向にパートナーを求めて波を広げていく。企業家たちによって広げら

れた波が社会という湖において波長が合い、そして相互にこの「関係」が有効であると認識されたとき、やがてその「関係」をもとにパートナーシップが形成されるのである。つまりカネや人材、情報などの資本はみな人間関係の網目上を移動しており、成功した企業家の信用に集中してくる。したがって、ビジネスを行う際、華商の「関係ネットワーク」への依頼は顕著であり、ハミルトンは台湾のこうしたビジネスシステムを「関係 (guanxi) 資本主義」と呼んでいる⁽¹⁶⁾。

また香港においても同じように「関係」は華商にとって重要な効用を持つ。ウォン (S.L.Wong)⁽¹⁷⁾によれば、中国の共産主義化によって中国を離れ香港に移住してきた上海の繊維業界の企業家も家族、同郷人、同業者などさまざまな「関係」を頼りに、香港における彼らの産業の再建と発展を図った。シンガポールの状況も同様で、中国からの移民は新しい環境において家族や親族の「関係」を頼りにし、またそのネットワークは華商のビジネスにまで広がる、とトン (C.K.Tong)⁽¹⁸⁾は分析している。

このように、華商のネットワークを形成している「関係」は彼らの共有する人倫関係を重んじる儒教文明の影響を受けた習性や価値観の結果成立したものであると考えられ

る。これは彼らのビジネスの場でコスト削減など経済合理的な効用を発揮した。アジアの経済発展における華商企業の成立は、まさにこの恩恵を受けているといえよう。

5 華商ビジネスにおける

「信用 (xinyong)」の重要性

マックス・ウェーバーが、プロテスタンティズムの倫理は資本主義の発展に貢献したと論じたとき、最初に「勤」(industry)と「儉」(frugality)という二つの概念を設定した。一方、中国明清代の商人の倫理では、「誠実」「不欺」(欺かず)が中心的位置を占める徳目であった。これはまさに、今日の華商に継承され、重要な道徳規範となっている「信用」にはかならない。

華商は「信用 (xinyong)」を重んじる。それはビジネスの基本である。「信用」は雇員の採用とビジネス・パートナーを選ぶ際、もっとも重要な要素である。ウォンの研究でも述べられているように、成功するビジネスマンに共通して備わっている素質として、しばしば誠実さが挙げられ、「信用」が重視されている⁽¹⁹⁾。シンガポール華商も同様、ビジネスにおける人間関係で「信用」がもっとも大切であ

り、そのため華商はしばしば親密な関係にある者としか繋がりを持たないという現地での調査からの分析もある⁽²⁰⁾。筆者が行ったサーベイ調査からもビジネス・パートナーを選ぶ際「信用」をもっとも重んじるという回答が多数を占めた⁽²¹⁾。インタビューにおいても「信用」の重要性を強調した華商が多かった。

有名華商の座右の銘でも「信用」を挙げているものが多い。香港経済界のトップ李嘉誠は「良好な信譽を構築することは至って重要であり、そうすれば自然と多くの人が自ら事業の協力を呼び掛けてくる」といっている。李嘉誠に並ぶ香港不動産業界のリーダー李兆基は「誠信は創業の基本である」と述べている。また、シンガポール華商で金融業界を取り仕切る黄祖耀は「華商の節儉と勤奮、そして親族との団結という美徳が居住地において事業を発展させることができた原因である。そして企業が成功する際にもっとも大切な要素は誠実であることだ」としている。「信用」は「関係」を育て、そして、それは契約や法のような働きをする。華商企業の間では「数億米ドルに上る取り引きや共同投資などが契約書なしに行われる程である」⁽²²⁾といわれるが、それを支えるのは彼らの「信用」なのであろう。

呉主恵は華商の実体を倫理的な性格から分析し、特に彼ら

の企業活動における「信用」の問題を取り上げてその効用を考察している²³⁾。呉は、「一般に信用の持つ確実性の社会的表現は、多くの場合、法律のそれに対する作用度の如何によって左右されるものである。商法の完全に行われている経済生活においては、対物信用が常に対人信用に先行するが、しかし対人信用が経済生活における主力的な地位を保持しているあいだは、企業活動の消極性を導き、そこに利子の高率現象を見るのである。華商財閥の場合は、まさにこの事情におかれている。言い換えれば、法的保障の不完全な経済社会においては、常に経済倫理の作用度が強く、たとえば信用の規準も人格によって決定されるが如きである。したがって資本活動は人格が常にその前提条件として考えられてくるのである」と華商ビジネスにおける人の関係の「信用」の重要性を指摘した。

さらに、華商の人為的閉鎖性、「信用」を要素とする経済倫理の範疇内に、家族的個人主義の性格が潜んでいると呉はいう。「これは合併組織において認めることができる。合併組織は資本を唯一の標準としてみた共通性からきた結合ではなく、全く人的関係に中心を置きたいわゆる資本の意志性が強く作用して結合されたものである。すなわち、その資本は人間を離れることができず、常に社会中におい

て伝統的に特定人の間のみ、その利用価値を許容された組織にすぎない」²⁴⁾。こうした人間主義的な資本の倫理価値の根拠は家族的、郷族的社會を精神的に基礎づけた儒教にあると呉はいつているのである。

6 家族を基礎とした経済活動

家族は「中国社会の細胞で、中国人の最も基本的な生活単位である」と費孝通²⁵⁾は述べている。すなわち、中国において家とは社會の根幹を成すものと考えられてきた。費によれば「村の基本的社會集團は家（Chia）、すなわち拡大家族である」。中国人が用いる「家（Chia）」、それは核家族の基礎の上に拡大した集團であって、西欧社會学の家族の概念（夫婦と未婚の子女から形成される集團）とは異なる。家集團の成員は共通の財産を所有し、共同の家系を維持し、仕事の分担を通して共同生活を実現するために協力する。村のより大きな集團は、多数の家が種々の目的で、また血縁や地縁の原理にしたがって結合することで形成される²⁶⁾ものである。これは前に呉が華商の企業形態は常に人間主義的であり、家族や郷族との精神的連帯、つまり「信用」から離れることができないといったことと無関係

ではない。

ところで、華商企業は家族経営であることが多く、そのため中小企業が多いといわれてきた。しかし、近年では華商企業の大規模化、事業のグローバル化が進み、企業の経営も近代化されつつある。雑誌『亜洲週刊』では、「国際華商500」という表題で毎年世界の華商企業の営業額をもとに順位付けを行ったものを発表している。その中で各華商企業の企業名、会社本部所在地と電話番号、所有者（主要株主）、企業経営者、主要業務、市価、営業額、資産総額などについて紹介している。

そこから解くことは、華商企業の家族経営の特徴が依然として残っていることである。各華商大企業を見ると所有者と経営者が一致していることが多い。すなわち、企業の所有者が自ら企業経営に携わるケースが多いということである。また、企業グループの場合、家族が持株会社を通じ、保有する傘下企業をコントロールするのが一般的でもある。つまり、企業経営・管理の体制は家族に集中されていることが多いといえる。経営近代化のため専門家を登用し、従来の家族経営から脱却を図る華商企業もあるが、それよりも子弟を欧米に留学させることで専門知識を身に付けさせ、家族経営を維持するものが依然として多い。これは呉

がいったように「信用」が家族内に止まっている一つの現われであろう。

また合弁の場合は、血縁関係や同郷関係など、密接な関係から組織されたものが多い。呉は合弁組織の特徴を以下のように述べている。華商社会は「人間関係を基礎条件とするがゆえに、資本が問題として提起されるよりも人間の問題が常に起ってくる。しかも権利義務を主張する組織ではなくして、共同救済を標榜する団体として見てきたからである。ゆえに単なる法律上の契約に止まるものではなく、信、和、忍の倫理性の内在する資本関係である」と言えよう。すなわち信を中心とする合弁人の『和』そしてそのための『忍』を条件として、合弁組織成員間の感情の融和を図ることをその団体的性格とするものである。なぜならば、合弁は家に似せられた組織性を持ち、絶えず、家族成員の共栄共凋の精神をその中に生かしてきたからである²⁷⁾。このように、合弁企業も家族主義的色彩の強いものである。いずれも、華商にとつての企業とは果てしなく家業に近いものであり、この点からこうした企業文化は儒教文明の影響を受けているといえるだろう。

7 儒教倫理と経済的合理性

マックス・ウェーバーは、プロテスタンティズムの倫理の成果は、親族の束縛を打ち破り、家と商業を完全に分離させたことであり、しかるに中国では親族の「個人」的関係をはなはだ重んじ、「事業効用(“enterprises”）」の観点がないため経済発展が制約され、また郷族や宗族との強い結び付きが生じる閉鎖的なエゴがむき出しになって、近代化への歩みの足を引っ張ったのだという議論を行った。しかし、ウェーバーの中国社会に対する認識には欠けていた部分がある。その点について、以下の例から検討したい。

明代には「夥計」制度が普及していた。「夥計」とはマネージャーに相当し、大商人の下で経営の管理やその補助をする者のことをいう。彼らの多くは宗族あるいは親戚の子弟の貧しいものから出ている。「夥計」は、後に独立し、自らも商人となるために一定の名声を得る必要があり、そのため大商人に信頼されるよう努めた。経営面そして倫理面でも一人前と認められた者は、「夥計」から商人へと成長していくのであった。こうした点を踏まえた上で、余は「夥計」制度の特徴を以下のように指摘している。第一

に、これは全く新たな、しかも普遍的な制度である。規模と組織からいっても、中国史上前例のないものである。第二に、大商人と夥計の関係は、明確に「老板(主人)」と「雇員(店員)」の関係にある。第三に、「夥計」は大方親族の子弟である。こうした事実は、明清の商人がいかにして伝統的な文化的資源を利用しながら、同時に既存の宗族関係を転化して新しい商業組合としたかということを明確に示している⁽²⁸⁾。これはまさしく中国の伝統から現代に至る一種の過渡的な方式である。明清の大商人と「夥計」の関係は、既に「事業効用」に向かって大きな一歩を踏み出していたのである。

また、斯波義信によれば、「ネットワークが宗族や郷族をベースにしていたとしても、既に複雑化した社会を持っていた一九世紀の中国では、郷里から外地へ出た人々の帰属の関係は、血縁や地縁の一本やりではなく、商業化した社会で競争して生き延びるべく、多重かつ多元な『関係(relationship)』を結んでいたのである。その様なメンバーシップに参加している事は、外地での身分証明書の役割を果たした。だから悪業を働けば自家や郷族の面子を汚したとされ、糸の切れた風になるほかない。その一方、資本をおこし合資するには、親族、郷族のほかにも同業者や他郷の人

とも、そして外国人すらとも『閩係 (Guanxi)』や『感情 (ganching) 情念などの意』の糸を張る」⁽²⁹⁾とのことである。ここからも分かるように、華商の親族や郷族における人的信用を武器にしたネットワークは効率的であり、合理的な要素を持っていたのであり、ウェーバーのように、閉ざされたエゴがむき出しになった社会とは断定できない。

次には、現代、身近に見られる華商ネットワークの典型的な例を見てゆく。香港に住む台湾生まれの李は本籍が福建の廈門である。彼は宝石販売をする傍ら、廈門では日本製の衣類を販売しており、さらに香港ではビジネスホテルを営んでいる。妻が香港のホテルを管理し、李は台湾、廈門、香港、日本を行き来している。李は同じ台湾出身の廈門人で、日本に居住する黄と長年の知り合いで、来日の際には必ず黄に会っていた。ある時、黄はいつも接待に使う三〇年来の友人の店に李を連れていった。そこが華商張夫人のレストランで、そのいきさつから李と張は繋がり、現在では張夫人に宝石を預け、その販売を依頼している。張は華商の間でも面倒見が良いとの評判があり、信望が厚く、多くの人が張の店に足を止めるという存在である。そのため、宝石を張に預けると少なからず売れるという。

李は日本などへの出張の際、子供を廈門にいる大学時代

の友人の母に預け、子守りをしてもらっていた。そして、その友人の母の紹介により、日本に居住している華商で、これも李という女性と知り合うようになった。李女史も廈門人で、廈門でビジネスを行っており、近年は廈門にビルを建て、不動産業をはじめていた。李と李女史は、本籍、苗字、ビジネスを行っている地域など（これは華僑社会の三縁関係、つまり地縁、血縁、業縁と合致する）共通点が多かったためか、密に連絡を取りあうようになっていた。そして、李女史の手掛けているビジネスである廈門のビルの建設資金は、中国国内にある李の金を借りて賄っていた。一方、李は廈門で販売する日本製の衣類を仕入れに来る際に、彼の方では日本円が必要になるため、李女史がビルの資金として借りた金を日本円で返していた。外資のやり取りであるが、こうすることにより、彼らは本来銀行を通すことによって差し引かれる手数料の削減や、その他さまざまな便宜を得るのであった。

また、李女史は日本でレストランを経営しており、それは偶然にも、上に述べた李の友人でもある張夫人の店の隣にある。そして、張と李女史、さらに黄は無尽の仲間でもあった。無尽とは、メンバーが掛け金を持ち寄り、順に融通しあうものである。華商は移民であるため、銀行からの

融資が困難であったり、利息が高いという問題があった。

無尽は、その対策として、互助を目的にはじめたものである。この恩恵を受けて商売をはじめ、会社を設立した者は多い。無尽は現在でも行われており、たいいてい毎月食事をしながら和やかな雰囲気の中で行われる。これは、さまざまな情報交換の場とビジネスの機会を作っている。そして無尽が「信用」によって成り立っていることはいうまでもないであろう。

香港の李が日本で張と仕事上の関係を新たに築いた結果、現在では、日本で中国貿易を行っている張の息子が香港出張の際には李のビジネスホテルを利用し、李が仕事上の手配を行うとのことである。個人的なものから、そのネットワークは家族にも広がっているのが分かる。ここに、彼らの「家族主義」が具体的に表われている。

上に見た具体例は日常的なものではあるが、信頼をもとに、国境を越えて協力し、互助互恵を計っている華商の姿が見られるであろう。ビジネスの規模や階級にかかわらず、華商のビジネスを支えているのは「信用」「関係」「家族主義」を基にした個人的なネットワークであり、それは経済合理性を追求したものであることが確認できる。

8 おわりに

以上、儒教文明と華商の経済活動について考察してきたが、筆者は必ずしもアジアの経済が儒教文明の影響ゆえに発展し、華商が二一世紀のアジア経済を制すると考えているわけではない。むしろ、儒教文明が華商の経済活動において、ある種の影響を及ぼす背景を持っており、それがさまざまな政治体制の下に居住する多くの華商に、ある一定の経済活動のパターンを維持させる源泉となってきたことを見てきたのである。「信用」を重んじ「関係」を育て、その中に生きることが彼らの共有する文化ないしは文明に由来する行動様式である。

しかし、「信用」や「関係」などの構築が社会的な投資になる一方で、同時にそれらに頼りすぎることによって、自由や自主性を失うことにつながることも見逃すことができない。また、人為的閉鎖性も懸念されている点である。しかし、実際、確かに現代の華商は儒教倫理の影響を受けた価値観を持っているが、同時に居住国や留学による西洋流の教育の影響を受け、極めて多元的、複合的な考え方や視点を有してきている。彼らのアイデンティティーもし

かりである。そして、経済活動を行う際には、経済合理性をまず第一に追求するという姿勢が強い。むしろ、現在では儒教文明や多元的なアイデンティティーなどは、ビジネスにおいて、合理的な効用を発揮しうる際の有効な道具として活用されてもいる。こうした点についての考察は別稿⁽³⁰⁾に譲りたい。

注

- (1) Hamilton, G. G., "Patterns of Asian Capitalism: The case of Taiwan and South Korea," Institute of Government Affairs, University of California, Davis: Research Program in East Asian Culture and Development, Working Paper Series, No. 28, 1989.
- (2) Redding, Gordon, *The Spirit of Chinese Capitalism*, New York: Walter de Gruyter, 1990.
- (3) Hamilton, G. G. (ed.), *Business Networks and Economic Development in East and Southeast Asia*, Hong Kong: Center of Asian Studies, University of Hong Kong, 1991.
- (4) 華商とは「国籍や世代を問わず、つまり華僑（中国国外に居住する中国系人）で、依然として中国国籍を保持するもの」、華人（居住国国籍を保持する中国系人）、華裔（世代を重ねた中国系人）を問わず、中国国外に生活の基盤を置く中国系ビジネスマン、企業家、商人を指す。
- (5) 儒教の倫理精神は文化の範疇に入れられたり、文明の範疇に組み込まれたりさまざまである。山崎正和氏によれば、「文化のルールが共有されるのは家族、村落、社交仲間にはじまり、せいぜい部族、あるいは民族内においてである。これとは対照的に、文明は異なる複数の部族、民族を内包して、一つの世界を形づくる。とはいえ、古代文明の場合には、その支配的影響力には限界があった。ギリシャ、中国、ユダヤその他の古代世界では、民族的文化と文明の境界線は一致していた。『山崎正和「環太平洋文明の誕生」』『中央公論』、一九九六年九月号、三七九～三九一頁参照。これに従えば、儒教が文化として捉えられたり文明として捉えられたりするのには、かつてその境界線が一致していたからであると考えられる。よって、華商の枠組で儒教を見る際も、その規定は非常に微妙である。しかし、華商自体が世界に散在し、それぞれ多種多様な背景を持っている中、儒教が普遍的に彼らに共有され、しかも彼ら以外の民族にも影響を及ぼし、観念化されている点から文明と捉えることができるであろう。
- (6) カルヴァン派の教義は「神の予定説」(predeterminism)に基礎がおかれている。ウェーバーはこの「神の予定説」と経済倫理のあいだに何か特殊な関連があると考えたのである。教徒の運命は神によって定められ、牧師や教会でさえも援助することはできなく、ただ、孤独に、そして、直接神と向き合い、神の道具として尽くすことによって、天国からの召喚があり、神の栄光に預かることができる、というものであった。
- (7) マックス・ウェーバー著、大塚久雄訳『プロテスタンテ

- イスマの倫理と資本主義の精神』岩波書店、一九八九年。
- (8) 金耀基「儒家倫理與經濟發展：韋伯學說的重探」『現代化與中國文化研討會論文彙編』香港中文大學、一九八五年。
- (9) レディングも文化は經濟活動に影響を与えており、その存在を考慮に入れるべきであると主張している。彼はウェーバーに倣って、中国の三大宗教である儒教・道教・仏教、なかでも特に儒教の倫理と精神を通して華商の中國的資本主義の理解を試みた。儒教思想の倫理である孝行・人倫・温情主義、合理主義、信用などは中国的な脈絡からいえばまさに宗教的規範であり、これらが中国的資本主義を発芽させたというのがレディングの主張である。Redding, Gordon, *The Spirit of Chinese Capitalism*, New York: Walter de Gruyter, 1990.
- (10) 余英時『中國近世宗教倫理與商人精神』聯經出版事業公司、一九八七年。
- (11) 同前、一五二頁。
- (12) 同前、一五六頁。
- (13) 同前、一六一頁。
- (14) 樋泉克夫『華僑の挑戦』*The Japan Times*、一九九五年、六一頁。
- (15) Hamilton, G. G. & Wang Zheng, *From the Soil, The Foundation of Chinese Society: A Translation of Fei Xiaotong's Xiangtu Zhongguo*, Berkeley: University of California Press, 1992, p.63.
- (16) (一) 同。
- (17) Wong, Siu-lun, *Emigrant Entrepreneurs: Shanghai Industrialists in Hong Kong*, Hong Kong: Oxford University Press, 1988.
- (18) Tong, Chee Kiong, "Centripetal Authority, Differentiated Networks: The Social Organization of Chinese Firms in Singapore," Hamilton, G. G. (ed.), *Business Networks and Economic Development in East and Southeast Asia*, Hong Kong: Center of Asian Studies, University of Hong Kong, 1991, pp.176~200.
- (19) Wong, Siu-lun, "Chinese Entrepreneurs and Business Trust," Hamilton, G. G. (ed.), *Business Networks and Economic Development in East and Southeast Asia*, Hong Kong: Center of Asian Studies, University of Hong Kong, 1991, p.13.
- (20) (18) 6p.182.
- (21) 筆者が華商に対して行ったサーベイ調査（一九九四年三月より五月、香港「シンガポール・マレーシア」で実施、三五〇部のアンケート用紙を配付、有効な回答は一六五部、有効回答率四七・一％）において、ビジネスの際「最も重視するものはなにか」という問いに対し、華商は「信用」を最も大切であると考え、六二・八％に上った。利益が最も大切であると考えた者は二〇・三％、そして強さ・コネや関係が決める手になると答えた者は九・〇％であった。一七・九％は以上の要素はどれも大切であるという回答であった。
- (22) 朱炎『華人ネットワークの秘密』東洋経済新報社、一九九五年、一三頁。

- (23) 吳主恵『華僑本質論』千倉書房、一九四四年、二五二頁。
- (24) 同前、二五四頁。
- (25) 費孝通『郷土中国』三聯書店、一九四七年。
- (26) 福永安祥『中国と東南アジアの社会学』勁草書房、一九九三年、四四頁。
- (27) 吳主恵『華僑本質論』千倉書房、一九四四年、二六一頁。
- (28) 余英時『中国近世宗教倫理與商人精神』聯經出版事業公司、一九八七年、二二〇～二二四頁。
- (29) 斯波義信『華僑』岩波書店、一九九五年、二二〇～二二一頁。
- (30) 拙稿「華商ネットワークの歴史的変遷」『アジア文化研究』第四号、アジア文化研究所、一九九七年六月、一一〇～一二四頁。

←八〇ページ下段より続く

にも深く関わっているが、これまでほとんど検討がなされていないこの種の問題を、具体的な実情に即して分析することなしに、この文明に関する意味ある言及は不可能であろう。

（本稿は文部省海外学術研究助成による研究の一部である。）